先生からは駄目だって言われているのに、頼くんは「こっちのほうが近い」と、田んぼの畦道を抜けて、ショートカットで家に帰ろうとしていた。そんな彼を見過ごせず、腕を引っ張って止める僕を「遠回りじゃん」と、軽くいなす。確かに、通学路を真面目に通れば遅くなるから、頼くんの言っていることは半分正しくて、だけど半分は正しくない。

「誰か来たらバレるよ」

「散歩してるじいちゃんぐらいしか通らねーって」

頼くんは僕の主張を鼻で笑うと掴まれた腕を振りほどき、稲刈りが終わったばかりの畦道を一直線に駆け出した。少しだけ涼しくなったこの町の、夕暮れの風の中。頼くんのランドセルの錠前は壊れていて、走るたびにカチャカチャと音を立てていた。

僕らの帰りが遅くなったことには、理由がある。

帰りの会が終わり、忘れ物が無いかランドセルの中を最終確認していると、宿題の作文プリントが無いことに気付く。引き出しや、後ろの棚を見ても入ってない。みんな足早に帰っていて、気付けば教室には僕一人。

どこを探しても全然見つからない。作文のテーマが僕にとっては難題で、授業時間をいっぱい使っても題名すら書けず、持ち帰りの宿題となってしまった。探すことを頼るような友達もいないし、そもそもそんな友達がいたら、宿題なんかとっくの昔に終わっていた。遠くから転校してきたけれど、ここの方言はどこか怒ってるようにも聞こえる。だからクラスの輪になかなか入れず、一学期も夏休みも、そして二学期が始まってからも一人だった。

探し物は一向に見つからない。その時、水筒を取りに戻った頼くんがやって来た。教室で不自然にあちらこちらを捜索する僕を見て「なにしてんの」と声をかける。正直に作文が無くなったことを伝えると、「ふぅん」と興味が無さそうな返事をしながら、ランドセルを教卓の前に乱暴に置いて、一緒に探してくれた。頼くんは笑わないし、いつも怒った顔をしていて、正直苦手だった。

一時間ぐらい探したと思う。最終下校を知らせる音楽が流れ、もう駄目だと諦めかけたその時、頼くんが「あった」とボソリと言った。見つかったのは、グループワークで移動をした時に座った机の中だった。そういえば、ここに入れた記憶がある。

僕はお礼と言おうとしたけれど、なんだか気まずくて口ごもってしまった。そのすぐ後に先生の足音が聞こえてきて、僕らは慌てて教室を飛び出た。

頼くんは畦道を駆けていく。僕はそんな彼の後ろ姿をずっと見つめていた。お礼も言わず、ハクジョーな奴だと思われたかもしれない。でも、明日会って言えばいいし。いや待てよ、

「なんで今ごろ」と嫌われるかもしれない。いやいや、嫌いになるも何も、そもそも僕らは友達じゃない。

そんなことをぐるぐると考えていると、目の前にいたはずの頼くんが、突然視界から消えた。

僕は気付くと、畦道を全速力で駆け出していた。お気に入りの白いスニーカーが泥で汚れたけど、そんなことはどうでもよかった。

「送ってくれてありがとね」

頼くんはぬかるみに足を取られて、畦道横の水路に落ちたのだ。駆け付けた時には下半身は濡れ、左の脛が大きく擦りむいていた。錠前の壊れたランドセルから中身が飛び出し、水路に散らばっている。僕はそれを回収した後、彼のランドセルに黙って入れた。俯いたままの頼くんが無言でゆっくりと立ち上がり、水路から上がろうと左足に重心を置いた途端、顔が歪んだ。足を挫いたようで、一歩一歩、左足を庇いながら歩く。

僕は何も言わずに彼の肩を支えた。「送るから」と言ったけれど、頼くんは駄目とも、良いとも言わなかった。

「学校にはお母さんに連絡をお願いしたから、おうちまで送るよ」

優しそうなお父さんが小学生の僕に深々と頭を下げる。頼くんはというと、奥でお母さんからお小言を言われていた。「あんなとこば通るけん、バチが当たったとよ」と、怒りながらもどこか嬉しそうな顔をしていたのが不思議だった。

「うちの悪(わる)かとがごめんねぇ。これ、食べんね」

今度は奥からおばあさんがやって来る。スーパーの袋いっぱいに詰め込だみかんを渡してくれた。

「頼は愛想のなかけん、お友達ば連れて来たのは今日が初めて」

奥では頼くんが不貞腐れている。お母さんからのお小言はまだ止まりそうにない。

「遅くなると心配かけるから、行こうか」

玄関の向こうでエンジンの音が聞こえる。頼くんは相変わらず小言攻撃から解放されない。

「頼くん、あのさ」

玄関を出る前に、勇気を振り絞って声を掛けてみた。

「作文、頼くんのこと書いていい？」
「……よか」
「その『よか』は、どっちの『よか』？」
頼くんはこちらをちらりと見ると、腕で頭の上に大きな丸を作って、にやりと笑った。僕もそれを見て、大きな丸を作る。
作文のテーマは、「ともだち」。畦道を通った話を書いたら、頼くん、怒るかな。